

伝承さしぬる夢舞台

— 国の重要無形民俗文化財

東郷文弥節人形浄瑠璃 —

東郷町斧淵に伝わる「東郷文弥節人形浄瑠璃」は、延宝のころ（1673年〜）大阪で人気であった伊藤出羽掾一座の岡本文弥の系統と考えられており、男の人形は一人で、女の人形は二人で操るために人形の遣い手が自ら踊らないと人形が生きた踊りにならないのが特徴です。

東郷の文弥節人形浄瑠璃が、いつごろから始められたのか明確ではありませんが、東郷町郷土史（昭和44年発行）などによると元禄11年（1698年）ごろ、薩摩藩主の参勤交代に随行した東郷の郷土たちが、郷里の子弟の士気を高めるために上方（京都・大阪地方）文弥節の師匠を連れ帰ったのが始まりだといわれています。また一説には、寛文10年（1670年）ごろ、江戸より連れ帰ったともいわれています。

東郷の文弥節人形浄瑠璃は、世襲制として斧淵三ヶ郷（城内・谷之口・小路）の郷土若衆たちにより永年伝承され、神社への奉納や秋の収穫時の村祭りなどで公演されてきました。

明治維新や第二次世界大戦など、さまざまな歴史の動乱の中でこの芸能を今日に伝えたのが長倉祐義氏・川添榮太郎氏・長倉孝夫氏と

伝えられています。

現保存会長の木場岩利氏も昭和22年から人形浄瑠璃に加わりご尽力されてきました。

当時の活動も決して平たんではありませんでしたが、町制施行記念式典や県民俗芸能大会などで公演を行い、昭和55年には文化庁の「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」として選択されました。その後も芸術祭などでの公演活動が続けられながら、平成8年には先人たちの築いたよき伝統を未来に引き継ぐために「子ども人形浄瑠璃」を結成。永い歴史の中で、今日まで携わってこられた多くの方々の努力に感謝するとともに、これからも多くの人に親しまれ、保存・伝承されることが期待されます。

